

令和三年度

麗澤瑞浪に学んで



麗澤瑞浪中学・高等学校  
Reitaku Mizunami Junior and Senior High School

発刊にあたって

校長 藤田 知則

## 第一部 伝統の日 感謝の集い

いのちをつなぐ

3年 永治 花佳

この「麗澤瑞浪に学んで」は、毎年六月に行っている「伝統の日・感謝の集い」での発表原稿、生徒寮で開かれる体験発表会での発表原稿、高校三年生卒業時の「麗澤瑞浪に学んで」など、本校の活動の中で綴られたものを纏めたものです。本年度もコロナ禍の影響を受けた一年でありました。一部の行事は中止することになりましたが、感染防止対策を徹底して、学年行事や代替地への修学旅行など、友人たちとの楽しい思い出を作る機会を設けることができました。学校教育における行事の重要性を改めて感じさせていただきました。本校は、昭和三十五年に、全寮制の学校としてスタートしました。多様な人間関係の中で学び、時に葛藤することは人間の成長に不可欠で、今の時代にこそ価値が高まっていると感じます。国難とも言えるこの時期に、国家、社会の発展と人々の安心、平和、幸福の実現に寄与できる人物を育成する本校の教育の一端を感じとっていただけたら幸いです。

私は麗澤瑞浪中学校での道徳の授業を通し、私たちは数えきれない程多くの人々に支えられて今まで生活することができていたのだ、ということに気付くことができました。食事をするにしても、食材を作ってくれる人、調理をしてくれる人、食費を払ってくれる人など、身近な人から顔も名前も知らない人までが私たちの生活に関わっています。そのように私たちを日々支えてくれてる人の中でも特に大切だと言えるのは両親をはじめとする家族や祖先であると私は考えました。親や祖先は私たちの命の根源であり、命をつないできてくれたおかげで私たちはこうして生きています。私たちが産み育て、嬉しいときも悲しいときも寄り添い支えてくれた親を産み育て支えたのはその親で、その親を産み育て支えたのはその親であり、直接の関わりはなくても祖先は私たちを支えてくれています。そ

んな親や祖先に感謝し、何をしていくべきかを考え、与えられた命をつないでいくことが最も大切であると辿り着くことができました。父から教わった「生命(いのち)のリレー・ランナー」という言葉があります。この言葉は子を産み育て、命をつないでいくことをリレーに例えていて、私たちはそのランナーとして次の世代にいのちのバトンをつなげていく役割があるという意味です。

近年、日本では少子化が大きな問題となっています。その要因の一つに子孫を残すことがあまり重要だと考えられなくなっていることがあるのではないのでしょうか。子どもを産みたくても産めなかったり、家庭にも様々な形はありますが、産むことができるのに産むことを望まなかったり、家庭を持たずに一生を過ごすことも少なくありません。生まれてくる子どもの数は1971年に200万人程度だったものが、2019年には86万人と約50年間で半分以下にまで減少しています。そこで、自分自身が生命のリレー・ランナーであることを自覚することで、子を産み育て、いのちをつないでいくことへの考え方を変え

ることができ、生命のリレーが途絶えることなく続いていけるのではないかと思いました。

私たちは、将来誰かの役に立つことができず、仕事に就くために、今こうして勉強しているのだと思います。私たち自身が社会の役に立つことも大切ですが、未来の社会のために子を産み育てることは、未来の社会を支えることであり、より大切なかもしれないと思うようになりました。私たちは今まで支えてもらうばかりで支える側になることはあまり多くはなかったと思います。たくさん支えてもらったかわりに、今の社会に役立ちながら、未来の社会を支えていく人々を産み育て支えることによって、直接的に社会を支えられるだけでなく、私たちの祖先のように間接的にも支える側になることができると思います。

私は今回、いのちのつながりの大切さについてよく考え、親や祖先に感謝し、少しでも長いのちをつないでいきたいと思いました。私はなぜ生まれてきたのだろうかと問うことはあっても、答えを出すことはできませんでしたが、与えられた命を次の世代へとつないでいく役目であるということも答えの一つで

あるのではないかと思うようになりました。

いのちをつなぐことは親や祖先に対しての恩返しや未来の人々を支えることができるだけでなく、自分自身の幸福につながり、よりよい社会を築くことができるのだと思います。

私たちは多くの人々に支えられていることに気が付き、未来を支える側になっていかなければなりません。親や祖先から受け継いだ命を子孫につなげていくことは、決して簡単なことではないかもしれませんが、しかし、子孫を残し、命をつなぐことが明るい未来の社会を作っていくことになるのではないのでしょうか。



## 私たちの使命

6年 大賀 さくら

「つながり」と聞くと皆さんは何を思い浮かべますか。一人の命から大勢の人へつながる命のつながり。国を守り発展させてきた人のつながり。恩師や先輩の教えを受け継ぐつながり。創業者から何代もつながる企業につながり。私たちは様々なつながりの中で生きています。しかし今、新型コロナウイルスの影響もあり、そのつながりを受け継ぐ意識が希薄になりつつあるのではないのでしょうか。国内だけでも毎日何十人も命が奪われ、いくつもの企業が倒産している時代に私たちは生きています。

私の家系では、毎年1回祖父の郷里、岡山県に親戚一同が集まります。その場合は、命をつないでくれたご先祖様に、深い感謝を伝えるとともに今後の精進を誓う場であると父に教わりました。この話を聞いて、命のつながりについて考えた私は、ふと東京の靖國神社を訪れたときのことを思い出しました。

靖國神社には、江戸時代の終わり以降、国

家のために殉難した人の霊が祀られています。神社の境内にある遊就館には、近代日本の戦争について説明された映像やパネル、実際に使用された道具などが展示されていました。

その中で私が最も衝撃を受けたのは、特攻隊員の方が家族にあてて書いた遺書です。まだ産まれていない子供の成長を願うもの、自分を産み育ててくれた母へ感謝を伝えるものなど様々なものがあり、涙なしには読むことができませんでした。どれだけの人が私たちの国、日本に誇りを持ち、愛する人を守ろうとして戦地へ向かったのでしょうか。連合国との圧倒的な物量の差があつた中で戦つた私たちの祖先。命のつながりが途絶えてもおかしくない中で、私たちにまで命はつながってきたのだと。

日本という国をつないできた人たちもいます。歴代の天皇がそれにあたります。天皇の一番大切なお務めは宮中祭祀であると道徳の授業で教わりました。宮中祭祀とは、天照大神をはじめとするあまたの神々をお祭りし、国の平和と国民の幸福を祈ることです。祖先である歴代天皇の霊にも感謝の祈りを捧げて

おられます。2000年以上も昔の初代・神武天皇から126代の令和の天皇陛下まで一貫してつないでこられた「祈り」がそこにはあります。

廣池千九郎先生は、これらのつながりには「宇宙自然のはたらき」があると教えてくださいました。私たちは宇宙自然のはたらきによつて生かされている存在で、言い換えれば私自身も宇宙自然の一部なのです。これらのつながりに気づき、感謝して、恩返しすることが宇宙自然のはたらきになうことであると分かりました。

私たちが生かしてくれている存在の一つは、国家です。現在も様々な紛争が起こっている国もありますが、私たちは安定した秩序ある国に暮らすことができます。二つ目は祖先です。遠い昔の先祖からの長い営みの先に私たちの命が繋がっているということは奇跡であると言えます。

私たちの使命は、私たちが生かされている存在であることを理解すること、そして生かされていることに感謝することだと思えます。そして私にできる恩返しは、日々健康に過ご

し、未来へ命をつなげていくことだと考えるようになりました。

このようなことに気付くことができたのは、麗澤瑞浪で正しい価値判断の基準を学ぶことができたからです。私の立場での恩返しは、麗澤瑞浪の理念である、自立、感謝、思いやりの心を持ち、何事にも感謝して生活していくことだと思えます。この気持ちを胸に、これからの学校生活や寮生活に前向きに取り組み、自分自身を成長させていくことをお誓いします。



## 第一部 寮内体験発表会

### 【高校男子寮】

青春と一瞬

A3寮 6年 杉山 晋二

私の青春は一瞬でした。

私は今、六年目の寮内体験発表を迎えます。こんなにもはやく六年目を迎えようとは、あの頃の私は考えてもみませんでした。

あの頃の私というのは中学校一年生の時の私です。中学一年の時は、今でも忘れもしないつらい毎日を送っていました。もともと私は親元を離れるのが嫌でした。しかし祖父などのすすめもあり麗澤瑞浪の寮に入寮しました。毎日が不安の中過ごしていました。学校でも部活でもなかなかじめず、思い悩んでいた時に寮に帰るといつも今の六年生のみんながいました。学校での勉強や友人関係など上手いかわなくて落ち込んでいても、帰ったらそこにはいつもみんながいて、話をしたり、ランプしたり、一緒にお風呂に入ったり、バカみたいなことしたり、先生に怒られたり、

そんな何気ない一日一日がどんなつらいことも忘れさせてくれる気がして、私はいつの間にか寮生活が好きになっていました。

話は変わりますが、私は中、高と寮長を務めてきました。先輩にも後輩にも、もちろん同級生にも恵まれ、みんなに支えてもらいながらなんとか寮長としての生活を送る事が出来ました。私の好きな格言に、「他を救うにあらず己を助くるにあることを悟る」という格言があります。寮長というのは、つねに率先して行ったり、時には友達に注意して仲が悪くなりそうになったりなど、やりたくない様な仕事がほとんどでした。しかしこの格言を思い出し何度か助けてもらいました。

私はこの六年間いろんな経験や出会いをしました。もちろんその中には良いことばかりではありませんでしたが、私の中には中一から今までの思い出が鮮明に残っています。こんな経験をさせてくれた先生、友達、先輩、後輩にそして何よりいつも見守り応援してくれた両親には感謝しています。「ありがとう」

私はさまざまな先輩の姿を見て育って来ました。良い姿も悪い姿もそれが伝統となり私

につながっています。もうあと一ヶ月もない私にできることはこの伝統をよい形で受け渡すことだと考えます。この六年間してきた消灯、スリッパならば、掃除、挨拶、どれもが良い形でつなげられるように残り少ない日々、全力を捧げたいと考えています。

最後にはなりましたが、この作文の題名の「青春と一瞬」とは私の好きなアーティストの好きな曲名から取りました。その曲の歌詞の中に、「時間は少し足りないのがいい 青春と一瞬はセツトなんだぜ」というフレーズがあります。私の中

学、高校とすべて  
の青春をこゝ麗澤  
瑞浪で過ごしまし  
たが、本当に一瞬  
でした。後悔なん  
で少しもないで  
す。みんなと過ご  
したこの六年間は  
私の生涯の宝物で  
す。ありがとうご  
ざいました。





## 【女子寮】

瑞浪の地に学んで

B3寮 6年 橋本 有希野

六年と聞くと長いように聞こえますが、この麗澤瑞浪での六年間は私にとって本当にあっという間なものでした。それと同時に、忘れてたい多くの出来事であふれた六年間でした。

B3寮の寮長にならせていただいて、新体制として始まる時、私自身の中で、これだけは守りたいと決めたことがありました。そ

れは、退寮の日を寮のメンバー全員で迎えるということでした。私はこの六年間で、様々な事情で退寮していく同級生や後輩を見てきました。それは本当に心の痛むことで、私は未だにその傷から立ちなおることができていません。あの時気がついていれば、声をかけていれば。そんな後悔を私もしたくないですし、寮の皆にもしてほしくないのです、これを目標にしました。

しかし、この一年は多くの困難がありました。中学生と高校生が同じ寮で生活するということ。それぞれの学年での人間関係。少し前の私は、それらの問題を自分一人で抱え込もうとしていました。また、皆の前では涙を見せてはいけないと思い、母に電話をかけては毎回のように泣いて心配ばかりかけていました。

そんなある日、学校である先生にお手紙を頂きました。そこには「心を尽くしてくれてありがとう。でも、あなた自身が疲れてしまわないか心配だよ」と書かれていました。その先生は、今は直接の関わりのない先生でした。その小さなお手紙は、疲れ果てていた私

の心を癒してくれ、分かってくれる人はいる、自分はまた大丈夫だと思わせてくれました。

私が支えられたのは先生だけではありません。大事な九人の仲間もそうでした。大した言葉がなくても自分のことを理解して、何十分も話を聞いてくれ、ときには相手も泣きながら相談しにきてくれる。そんな友達に巡り会うことができました。仲間がいなければ、ここまで来れることは絶対にできませんでした。本当に感謝しています。

私が麗澤瑞浪で学んだことは、そのような周りの人の温かい心です。私たちは、辛いときには気持ちに余裕がなくなり、視野が狭くなってしまいがちです。でも、周りを見回してみると、自分を見守ってくれて、愛してくれる人は沢山います。たとえ寮生活をして離れていても、親はその例外ではありません。

そのことに気づくことができたのも、この学校に入学して、親と離れ、多くの困難にぶつかったからです。楽しかったことやしんどい気持ち、経験した困難など、今は全てのものに感謝しています。

「自立・感謝・思いやり」と何度も聞いてき

ましたが、寮生活をして得られるものは結局この三つであったと思います。伝統を受け継いでいく後輩たちには、この言葉を忘れずに生活してほしいです。そして、卒業していく私たちは、麗澤瑞浪の寮生活で学んだ、忘れることのできない、他には代えることのできない六年間を活かして、社会に貢献できる人間になっていきたいと思えます。

### 寮で過ごした半年間を経て

#### B1寮 1年 萩原 愛麻

約半年間の寮生活を経て、私が寮生活をやる中で大切だと思ったことは三つあります。

一つ目は、挨拶・礼儀です。「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」「ありがとう」はもちろん、麗明寮では先輩に会ったり、すれ違ったりしたら、「お疲れ様でした」、先輩に失礼なことをしてしまったり、道を開けたりするときは「失礼しました」、先輩に何かを頂いたり、何かをして頂いた時は、「どうもありがとうございます」「ございました」、これらも基本の挨拶・礼儀です。

思えば寮に入る前まで、私は挨拶を十分にできていませんでした。されたら返す、というだけで、自分から進んで挨拶することはほとんどありませんでした。

礼儀に関してもそうです。「ありがとう」「ごめん」と口にすることは少なからず出来ていましたが、声小さく相手にも聞こえていなかったと思います。夏休み、帰省した時に家族や友達から「挨拶すこいね」「ハキハキ喋るようになったね」と言われたのは、寮生活での小さなことを積み重ねていたからだと思えます。

二つ目は、家族の大切さです。今までは、学校から帰れば家族がいて、一緒にご飯を食べるなど、すぐそばに家族という存在があるのが普通でした。だからこそ、何か言われたらつかつかとなつて言い返してしまうのかもしれない。しかし、寮では親元を離れての生活のため、洗濯や掃除など、今まで親にやってもらっていた身の周りのことを全て自分でやらなければなりません。更には、今まで食材、文房具くらいだったお使いだって、洗剤やティッシュ箱なども自分でお金を出して揃

えることになるのです。

これだけを聞けば、「寮は大変なんだな」と思うかもしれませんが、もちろん大変なことだけではないし、むしろ楽しいことの方が多いです。

やはり寮であると、みんな出身も育った環境も異なり、文化や価値観が合わず、言い合いに発展してしまうことも少なくないです。でも、だからこそお互いの文化や価値観も尊重し合おうと思えるようになった。それが、三つ目です。

これからもいろいろな壁に立ち向かうことになるかもしれませんが、その度に仲間と協力し、より仲を深めていきたいし、乗り越えたいと思います。まだあと約五年四ヶ月を麗澤瑞浪で過ごすことになると思いますが、その間も挨拶、礼儀、家族の大切さ、思いやりを忘れず、社会で活かしていきたいです。

## 【部活寮】

気付いたこと

野球部寮 5年 谷森 太一

僕は、この麗澤瑞浪高校野球部寮に入って気付いたことが三つあります。

一つ目は、寮での生活がプレーなどに出てくるということです。この寮に来て早寝早起きの習慣がつき、掃除などの整頓をしつかりとしているとプレーに堅実さが出てきたり、ミスなどが減ってきたように思います。しっかりととした生活習慣は、良いプレーにもつながっているんだなと感じました。逆に、時間を守れなかったり掃除を怠ったりしてしまうと、運などにも見放されると自分は考えています。ここぞという場面でしっかりと結果を残せるようにこれからもきちんとした寮での生活を過ごしたいと思います。

二つ目は、目配り、気配り、心配りの心が養われていると感じたことです。それはスリッパの乱れがあったり、ゴミが落ちていた時などに、すぐに気付き行動できるようになったことや、挨拶や礼儀などの気配りが出来るよ

うになったことです。目配り、気配り、心配りは大人になったときや、今後の人生でも絶対に必要になってくると思うので、この寮で少しでも目配り、気配り、心配りができるようになったと感じられてよかったです。

三つ目に、親への感謝です。仕送りなどの大切さや感謝の心が一年半の寮生活を通じて特に感じました。家では、欲しい物はすぐに手に入りますが、この寮では荷物が送られて来ないと自分たちは何もできないと思うと、とても感謝の心でいっぱいになります。この心は、寮生活をしていないと気付けないことだと私は思います。他の高校生が気付いていないことを早く気付けたのは寮生活の良さだと思いました。

最後に、この寮生活では、自立・感謝・思いやりの三つが特に重要だと思っています。この三つは寮生活をしていないと気付けないことでした。私は、この寮に来て、自立・感謝・思いやりの心が備わったことで大人になっても苦労しないと思っています。あと一年間寮生活が続きますが、野球や勉強、交友関係を通じて新たな気付きや発見をし、良い大人に

なるために成長していきたいと思っています。

私たちの目標は、甲子園出場です。グラウンドだけでなく、寮生活でしっかりと行動し、日本一の寮生活を目指していきたいと思えます。



寮生活を通して学んだこと

テニス部寮 6年 村田 英夢

私はこれまでの寮生活を通して、さまざまなことを経験し学びました。一つの例としてある体験について話したいと思います。



それは、人間関係についてのことです。学  
校生活、部活動、寮生活などで、先輩、後輩  
同級生、先生などいろいろな人との関わりの中  
で私たちは生活して来ました。その中でも  
当然上手くいくことばかりではありませんで  
した。私が五年生の時、同級生とダブルスの  
練習をしていました。一面で何人かで練習し  
ている中で、当然人間なので、集中力が上が  
って調子がいい時もあれば、そうでない時も  
あります。上手くいかないことが多いと思  
います。そのような張りのない練習をし  
ていても高いレベルは目指せないと思い、  
時々、仲間を鼓舞し、技術的に教えられ  
ることがあれば伝えるようにしています。しか  
し当時の私は、同級生に対して必要以上に強  
く言ってしまう、態度、雰囲気から、プレーに  
集中しづらい空気を作ってしまった。私  
がその経験から学んだことは、自分が良い  
と思っただけに口にするのも、伝え方や態  
度、姿勢次第ではかえって悪影響になり反  
省の芽をつんでしまうことがあるというこ  
とです。誰しも強く言いやすい相手、指  
摘しづらい相手が居て、相手の欠点を指  
摘するということは

心地よいものではありません。しかし、その  
ままにしているのは集団が良くならないので  
先や先輩は時に叱って、正そうとして下さ  
るのだということも学びました。しかし、自  
分と相手の立場によって伝え方はよく考  
えるべきです。相手が自分にとって強く出  
やすい相手だからと言って自分のことを棚に  
上げて相手に強く当たり、自分の立場や権  
威を持ち上げて偉くなった気分になる人も  
います。しかしそれは良い人間関係には繋  
がらないのだと分かりました。五年生の時  
は心も幼く、よく分かっていなかったの  
で軽率な発言をしてしまっていました。も  
っと相手の立場を考え、伝え方を工夫し  
ていけばより良い雰囲気や質の高い練習  
ができていただろうと思います。これか  
ら人も人に改善点を指摘する際は相手の  
攻め過ぎず、相手の気持ちを盛り上げる  
ような工夫をしたいと思えます。皆さんも  
伝え方を考えるように心がけ、逆に指摘  
を受けた際はありがたいと思っ  
て素直に受け取るようにしてほ  
しいです。

そして、そのような自分の行動を見直  
すために一番大切なことは感謝する心と謙  
虚でい

ることだと教わりました。自分たちの今の活  
動は昔からの先輩方、先生、学校の繋がりが  
あってこそだと何度も伝えて頂きました。ま  
た、いつも支えてくれるチームの仲間、親へ  
の感謝が心の中にあり謙虚さを忘れなければ  
決して傲慢な態度、言動にはならないと思  
います。「心の習慣」にあるように、心が変  
わることが行動を、結果的に人格を変えます。  
これからも常に感謝の心と謙虚さを大切に  
していきたいと思えます。



## 【中学男子寮】

みんなが気持ちよく過ごせるために

B11寮 2年 中島 悠人

僕が一年と半分くらい寮生活を通じて感じたことは、みんなが気持ちよく過ごせるために自分なりにできることを探して、それを実行することの難しさと大切さです。

寮生活をするのであれば、それはみんなが気持ちよく過ごせるほうが当然いいと思います。人は第一印象がとても大切と言われますが、それは寮でも言えることで、トイレや集會室などに入ったときに、整理整頓ができていて、ゴミも落ちていなくて、清潔できれいだと思うか、汚いと思うかで、入った人の気持ちも違うと思います。

きれいと思われるために僕がすることは、ゴミ袋がゴミでいっぱいになるときに替える、集會室の机を揃える、トイレのスリッパを揃える、ということですね。みんながわざわざしたくないことを自分が率先して行い、みんなに少しでも気持ちよく生活してもらおうと努力しています。面倒くさくなったりして、その

ような行動をとらないときもあります。たとえ簡単なことでもやり続けることの難しさを学びました。

また、自分が使うときにスリッパが揃っていないと、とても気持ちよく過ごすことができません。僕が気持ちよく過ごせるといことは、たぶん他の人たちも僕と同じ気持ちで行動したのだと思います。

このような行動をするのは簡単ではないですが、寮生活を通じて大切さを学んだので、これからも自宅や学校でも実行しようと思います。



## 第二部 修学旅行

【五年生】

5年3組 高木 美緒

先日の修学旅行で特に印象に残ったのは白川郷での見学だ。バスに乗っている時には合掌集落の特徴や村の人々の暮らしなどを教わり、地理的条件によってできた決まりごと、建物のつくりを詳しく聞いたのが面白かった。茅葺の家では、一年中昼夜を問わず火を細くたいているそうで、煙による防虫効果や建物の強化が期待できるそうだ。数百年も前に建てられた家なので、研究によるそれらの効果の科学的な実証はきつとされていなかったのであろうが、自然に生きるものをうまく活用して「自然と共に」生きてきた当時の人々を想像して感動した。

また、実際に建物を見てみると、自分が想像していたよりもはるかに大きくて驚いた。自動で動いて大きなパワーを生み出す機械がそんなに存在しない時分に、あそこまでがっしりしたつくりの建物が作れるものなのか、

コンクリートも使わずに何年も風雨に耐える頑丈な建物なのかと改めて感心した。合掌集落の世界遺産たるゆえんをよく知らなかったが、自然の中に生きた人々の証を形として

ここまで残し、文化を継承してきたからなのだろうと、見学全体を通して感じた。今は科学技術が発達していて、昔のようにそれらの技術を使わずに生活していくようなことは私達には到底できないであろう。実際、和田家の中には光々と電気がともり、展示物の説明が音声で流れていて、暖をとるのにはいろいろの代わりにヒーターが使われていた。それほどこに昔の暮らしの様子を再現し、未来へ伝えていくことは難しいのだと思った。私は和田家の中にヒーターがあるのを見て少なからず違和感を覚えたが、それも今の時代には必要だと思うので仕方ないことだと思う。これからの未来はもっと技術が発達していくので、国の歴史を感じることでできる遺産があるがままの形で後世へ伝えていくことは、極めて困難である。しかし、時代の流れにつれて「淘汰」されるのではなく、流れに沿って適宜「融合」しながらでもできる限り保存していくこ

とが大切だと感じた。なにより、展望台からのなんとも言い表せない趣ある景色を見て、この素晴らしい日本の風景を守っていかねばと強く思った。

私が今後、この体験を通して頭の中に置いておきたいと思った考えがある。それは、特別の中にある日常だ。私たちはこの度「修学旅行」という一大イベントの中で普段行くことのない地に行き、触れることのないものに触れたわけだが、私たちはそれを「特別」ととらえるべきではないと私は思う。遺産の中にも一般市民は暮らしている。その方々にとっては「日常」なのであって、私たちが「特別」と感じているだけなのだ。私たちは特別感を感じると、自然とそのものから自身を隔ててしまいがちであるが、もっと親しみを持って接することもできるのではないだろうか。この考えは自分の所属の外側を理解する上でかなり重要であると思うので、妙な「特別」を問わずにどんどん自分の知る世界を広げていきたいと思う。また、逆も然り、日常の中にも特別な何かは山ほどある。「日常」のすべてが「特別」でできていると言っても過言ではな

いほどだ。この修学旅行でひしひしとそんなことを感じた。

特別の中に生きていることに私たちは感謝しなければならぬ。いつ何時もとは言わなくても、ふと思つたときに感謝する。それだけでも人生より明るくなると思う。この修学旅行で私はたくさん感謝の機会をいただけたので、日頃の生活に、親に、環境に、支えて下さる先生や友達にたくさん感謝の気持ちを示したい。

最後に、日常から飛び出して私たちに学習・気づき・親睦を深める時間を用意くださった先生方、本当にありがとうございます。





## 【六年生】

### 6年4組 加藤 寛也

私は今回の飛驒高山修学旅行を通じて、普段授業で得ている学びが現在の世界ではもちろん、昔の世界でも生きづいていたということとを深く感じた。私は幼いころから家族と一緒に何度も飛驒高山に旅行しに行ったが、ただ古い街並みを歩き回り、美味しいものを食べるだけで、学びを得ようとするとはしていなかった。しかし、今回数年振りに飛驒高山に行つて、新たな発見をした。

そのうちのひとつが、人々の暮らしはその地域の持つ性質によって創り上げられるということだ。このことを一番に感じたのは白川郷だ。白川郷の合掌造りは、この地域で雪が多く降り、それによって家が倒壊するのを防ぐために屋根の傾斜を急にするというものだ。それだけでなく、水はけのよい所で育つ桑を餌として、合掌造りの家の上階で蚕を育て、養蚕が盛んに行われていた。その他にも、飛驒で有名な飛驒牛やさるぼぼなども、この地域の持つ気候、地形などによって創り上げられ守られた文化となっている。

このようなことは、今私が学んでいる地理と深く結びついている。私が高校一年生のころ、今やつている勉強は役に立つのだろうかと考え、勉強から目を逸らす言い訳にしていたが、それは今やつている勉強と現実世界との結びつきを感じられなかったからだと思う。今回の修学旅行を通じて、特に地理について、今普段の授業で得ている学びが歴史の中で応用されていることを自らの目で見て、自ら考えることができた。

鉄血宰相と呼ばれたビスマルクは次のよう

な言葉を遺している。

「愚者は経験から学び、賢者は歴史に学ぶ」  
今学んでいることは人類が積み上げた歴史の結晶だ。それを学べることに感謝し、歴史から学べる人になりたい。

## 第四部 六年生 麗澤瑞浪に学んで

呉羽 珠季

私に六年間麗澤瑞浪で充実した学校生活を送らせてくださり、ありがとうございました。麗澤瑞浪に入学したばかりの中学生の頃は、内気のため授業中に自分の意見を発表したり、進んで何かに立候補することはとても無理でした。しかし、今は授業中に発言する事に苦痛を感じなくなり、生徒会役員に立候補してしまうほど、人間的に成長することができました。それは深く実践的な道徳を学ぶことで、他人のために喜んで行動する最高道徳を身に付けることができたからだと考えています。

生徒会執行部に入ってみると、予想以上に大変でした。最高道徳を実践することも簡単

な事ではなく、その過程で多くの学びを得ることができました。

生徒会では企画書を作り、各委員長達と話し合いを行い、実際に相談してきた企画の運営を行います。委員長と執行部で企画を詰めていく際に、アイデアが全く出ず、行き詰ってしまう事がよくありました。それは、特にコロナウイルスの蔓延により、「密を避ける」という理由で今まで先輩が行ってきた活動内容を、ほとんど参考にできなかった事も大きな原因でした。悔しくて「コロナが無ければできたのに」と、どうしようもない状況に怒りをぶつけてしまう事も多々ありました。しかし、他の生徒会メンバーや先生方のおかげで、最悪な状況だからこそ前向きに考え、良いアイデアを出すことができるように気持ち切り替えることができました。最終的にパソコンを使ったオンライン上でイントロクイズ、写真撮影会など、これまでにない生徒会行事の運営を行い、コロナ禍だからこそその企画を実施することができました。この経験から、最悪な状況の時こそ、前向きに考え、柔軟に対応することの大切さを学びました。

最高道徳とは他人のために人が嫌がる事も

喜んで実行することです。忙しい時に、人から頼み事をされ、それを実行する。床にゴミが落ちていたら、ゴミを拾う。このような他人のために行動することはとても難しいことです。しかし、麗澤瑞浪の道徳教育によって、どんな時でも他人に尽くすことの大切さを学びました。私の夢は国際的な看護師になり、多くの人の命を救うことです。この夢を見つめられたのも、他人のために尽くす奉仕の精神を麗澤瑞浪で学んだからかもしれません。

麗澤瑞浪での六年間という長い時間を過ごすことができ本当に幸せでした。中学高校生活で得た多くの友達や、学びをこれから大切にしていきたいです。

### 河村 俊輔

私は六年生の初めに、一年間の目標を定めました。「感謝・謙虚・凡事徹底」です。この三つのことは私が麗澤瑞浪で学んできた多くの事の中で最も大切であると感じたと同時に、私がこの六年間で最も成長できたことだと思

っています。

私が個人的に、麗澤教育で大切にされている精神の中でも最も大きなものだと思うのは感謝です。この六年間で何事にも心から感謝し、そしてその感謝の思いを「ありがとう」と口にしたり行動に移したりすることができるようになりました。特にコロナ禍が始まって毎日昼休みに各教室の窓を喚起しに来て下さる先生や、毎晩学校中を消毒して回る先生の姿を見て、校内クラスターが起きていないのは先生方が陰で支えて下さっているおかげであると知ったように、たくさんの方に支えられて生きられていることを自覚できるようになりました。周りの家族や友人、先生方だけでなく、私を大きく成長させてくれた麗澤瑞浪、そして麗澤瑞浪を支えてくれたたくさんのつながりに対する感謝の心を、これからもずっと忘れずにいたいです。

謙虚でいることも、感謝に付随して学びました。麗澤教育の精神の中に、「自己反省」があります。何事も自分を内省しそれに伴って感謝の心を持てるようになりました。中学生の頃は嫌な事や辛いことが多くあり、その

不平、不満を外に向けることが多々ありましたが、麗澤で学びを得るにつれて自己を顧みるようになり、今ではかつてあったどんな辛い嫌なことにも、自分を成長させてくれた糧として感謝することができるようになりました。

そして、凡事徹底の精神は主に寮生活の中で学びました。寮の先輩方の姿を見てまず感じたことは率先垂範の精神でした。先輩方ばかりが描いていたイメージのように後輩に無意味な雑務をやらせるようなことは一切なく、ただやるべきことを実直にこなし、それを私たちに姿で示してくださいました。私はその姿に感銘を覚え、自分も上の立場になったら姿で示す人になりたいと強く思いました。そして実際に、六年間の中で私は寮役員や級長など様々なリーダーの役割を経験させていただきましたが、そのような立場だからこそ口だけでなく、凡事徹底の精神で姿で示すことを常に意識してきました。

この六年間で、私は本当に多くの学びを得ることができました。たくさんの学びを与えてくれた麗澤瑞浪に対する感謝の心はずっと

忘れずに、そして「感謝・謙虚・凡事徹底」の三つの精神もずっと絶やさずにいたいのです。そして、麗澤瑞浪への報恩のためにも、この三つの精神で社会に貢献し、社会で活躍していきたいです。

## 第五部 卒業式 答辞

松山 彩音

やわらかな日差しに、春の訪れを感じる季節となりました。新型コロナウイルスの感染拡大が危惧される中、私達卒業生のために、このような卒業証書授与式を挙行していただき、誠にありがとうございます。

先程は、理事長先生をはじめ、校長先生、在校生からの力強く、温かい御言葉を頂き、卒業生一同、心から御礼申し上げます。

入学式から、早三年、または六年が経とうとしていますが、麗澤瑞浪で過ごした日々を振り返ると本当に沢山の事が思い出され、様々な人に支えられてきたことを実感します。

入学式の日、人見知りだった私は、これからの学校生活に対する不安や緊張から、入学

式に行くのでさえ、怖くて仕方ありませんでした。そんな気持ちで迎えた入学式当日、母に背中を押され、勇気を振り絞って学校へ行くこと、バスを降りた瞬間から、特に一貫生の同級生が笑顔で話しかけてくれたり、ハイタッチや握手を求めてきてくれたりと、明るく接してくれました。こんなにもフレンドリーで優しい同級生ばかりで、本当に良かったと安心したのを覚えています。

高校生活の中で、思い出深いものの一つは部活動です。私は三年間、吹奏楽部に所属していました。新入生歓迎演奏会で、部員全員がキラキラとした笑顔で、楽しそうに演奏する姿に心惹かれ、入部する事を決めました。

先輩方に恵まれ、今まで知らなかった知識や技術を目の当たりにし、毎日が新鮮で、部活動に行く事が楽しみで仕方がなかったのを覚えていきます。また音だけではなく、体全体や表情で魅せる演奏をしていた先輩方に憧れ、自分もこんな演奏者になりたいと強く思い、必死になって練習していました。

高校生として、私は勉強に力を注ぎました。勉強する事にあまり意欲的ではなかった私が、

三年間、努力し続けてこられたのは、紛れもなく先生方、そして同級生のおかげです。先生方は頑張った分、努力した分だけ、しっかりと褒めて下さり、そして認めてくださいました。それが本当に嬉しくて、定期テストだけではなく、小テストも頑張ろうと思えました。また、勉強に対して熱心に取り組んだり、切磋琢磨し合う同級生の姿を見て、私ももっと上を目指したいという向上心が生まれました。

また、新型コロナウイルスの影響で、今まで当たり前だった対面授業でさえ、受けられない日々が続きました。オンライン授業が導入された時は、初めての事ばかりで不安でした。しかし、先生方はオンラインであっても工夫をしてくださり、対面授業とはまた違う、充実した授業を受けることが出来たのも良い思い出です。

最後に、私がどんなに酷く、きつい事を言っても受け止め、寄り添い、いつも私の味方でいてくれる存在として、両親や家族の存在がありました。あなたなら出来ると信じて、いつも応援してくれました。本当に心強かったです。私は二人の子どもとして生まれてき

て、本当に幸せです。今まで私を育ててくれてありがとう。そして、これからもよろしくお願ひします。

このように、学校生活の三年間または六年間に多くの人に出会い、支えられてきました。卒業後は、一人一人がそれぞれの夢や目標に向かって一歩ずつ進んでいきます。今までとは大きく違う世界に戸惑い、様々な困難にぶつかることもあるでしょう。しかし、私達は麗澤瑞浪で学んだ、「自立」、「感謝」、「思いやり」の心を胸に未来へ進んでいきます。

なごりは尽きませんが、理事長先生をはじめ、校長先生、先生方、家族、そして、学校生活を支えて下さったすべての方々に改めて、御礼申し上げますとともに、麗澤瑞浪高校の更なる発展を願って、答辞の言葉とさせていただきます。

